

● 対談 ●

性教育行政と現場

「バッシング」の中で考える

御出席（発言順）

広瀬裕子（ひろせ・ひろこ）さん

専修大学法学部教授。教育行政学，セクシュアリティ論。

田能村祐麒（たのむら・ゆうき）さん

田能村教育問題研究所所長

全性連（全国性教育研究団体連絡協議会）理事長

● 七生養護学校は違法？

広瀬 バッシングという言葉が使われなくても，性教育が強い批判にさらされたことが，いままでに何回かありましたね。今回のバッシングをどうとらえていらっしゃるでしょうか。

田能村 今回のバッシングの代表的な事件として，七生養護学校問題※があって，教育への不当な介入だと裁判になってますね。でも東京都は，性教育の内容とか教材が不適切だからと言うだけでなく，法的というか，「教育課程や教材の届け出を怠ったから処分したんだ」と言ってる。

この点，法律違反は明らかなんです。学校教育法施行規則では，教材を使う際には校長に届け出て，校長は教育委員会に届け出る必要がある。その形式を満たしていないと都は主張しているのだから。

※七生養護学校問題

知的障がいをもつ子どもが通う都立七生養護学校の性教育に関し，03年7月に産経新聞が「まるでアダルトショップのよう」などと報道。都教育委員会は性教育の内容，教職員の服務状況などを理由に関係者を処分した。同校生徒の保護者を含めた28名が，教材の返還，損害賠償などを求め，05年5月に東京都，産経新聞らを訴えた。性教協（“人間と性”教育研究協議会）が積極的に裁判支援を行っている。

広瀬 処分というのは，そういう形式的なことを突いてきますからね。

田能村 もう1つは，これも施行規則の問題で，教育課程の編成は学習指導要領による，とあります。だから，たとえば赤ちゃん誕生を大きな袋を使いながら教えるなんて，学習指導要領にはないから，基準からの逸脱だとされる。これまで逸脱かどうかなんて問題にされなかったけれど，裁判となれば，行政が指導要領は基準であると主張するのは当然でしょうね。

広瀬 その学習指導要領の基準の理解について、少し変化が起きているようにも思うのです。1958年に学習指導要領が官報に告示されたことをもって、文部省はそれに法的拘束力があるという解釈をとりましたね。

そして、学習指導要領からの「逸脱」を長らく規制してきたわけですが、遠山文部大臣の時に、いわゆる「学力低下」問題を背景にして、学習指導要領は最低基準であるというように文部省の解釈を変えました。これは性教育についても、言えるのではないのでしょうか。

田能村 もともと性教育には、基準制以前の問題があつて……もう随分前に、山形県天童市だったと思いますが、性教協の熱心な先生が小学校の授業で子どもたちに性交を教えていた。その様子がテレビで紹介されました。

それは等身大のお母さん人形とお父さん人形を使い、お母さん人形のワギナを示して、ここにペニスが入るんだぞと、子どもに手を入れさせる。そしてお父さん人形を上から重ねて、赤ちゃんはこうやって生まれるんだという教え方をしていたんです。

広瀬 いつごろでしたか。

田能村 80年代の後半ぐらいだったでしょうね。学習場面がテレビで放送されたが、子どもの手をワギナに入れさせるなど問題がありました。しかし性教協の幹部は、日本で性交を教えているのは私たちのグループだけと自慢していましたね。当時「性交を教えない者は性教育をやる資格はない」なんて言葉もありました。

ぼくは「性交を教えるのか、教えないのか」という話は、日本語としてもおかしいと思う。講演会で「性交を教わったことがありますか」と先生方に尋ねたことがありますけど、だれも教わった人はいないですよ。性交を授業で扱うか、扱わないのかわかる。どう扱うのかということであれば、その目的を知らせるのか、その方法・結果なのかということになる。しかし、いまの論議は「性交を教えるか教えないか」ということなんです。

●中教審「高校生以下の性行為否定」の影響

広瀬 いまの性教育バッシングは、性教育全体というよりは性教協に向けられています。バッシング派の狙いは性教育を対象にしてはいても、性教育そのものではなく別のところにあるのではと思えるんです。このへんをどうお考えでしょうか。

田能村 それはどうでしょうか？

広瀬 もしも性教育そのものをバッシングすることが目的ならば、性教育協会をターゲットにしてもいいわけでしょう。性教協より大きな組織だし。

田能村 でも性教育協会は、この問題では主張をしていませんから。

広瀬 主張はしないとしても、権威はあって、行政を通じて全国的な組織網も持っている。

田能村 権威はあるかもしれないけれど、全国的組織網といったものはない。

広瀬 ということは、性教協は、叩きやすいから叩かれたということでしょうか。

田能村 これまでの活動の経緯で狙われていたというか。法律違反があるから、この際やっておこうということじゃないでしょうか。

広瀬 それはまあ、確かに学校は全般的にあまり法的なことに厳格ではなかったかもしれません。もっぱらのバッシングのターゲットは性教協ですが、性教育全体への影響も小さくないと思います。どうでしょうか。

田能村 影響は出ていますね。たとえばこんなことがあります。文科省は「学校における性教育の考え方、進め方」という冊子を出していますが、それとは別に、各地の学校の指導案のうちで優れたものを集めて整理した教材をこの春に出すはずだった。3年間もかけて準備して、原稿もだいたい集まっていたのに、それが止まったままです。

広瀬 そうだったんですか。私はもう出るころだと思っていましたよ。どうしてその作業が止まってしまったのですか。

田能村 中教審（中央教育審議会教育課程部会の審議）の中間報告の影響でしょうね。05年の7月に中教審が「高校生以下の性行為は社会的に認められていない」として、「安易に具体的な避妊法方法の指導をなすべきではない」という基本方針を出しましたでしょう。

広瀬 あの影響力が大きいわけですか。その議論を受けて文科省が自主規制してしまった、ということですか。

田能村 まあ、そんなところでしょう。各県では、事例集はいつ出るんだと待っていたようですけど、いまだに出ませんから。

広瀬 中教審で性教育が問題にされた時に、文科省の担当者が「性教育の実情や性教育が直面している問題は、そうではありません」と説明すればよかったんですよ。中教審の委員は必ずしも事情を知ったうえで発言しているとは限らないのだから。

田能村 そうしたデータは出しているんですが.....文部科学白書などでも、性教育の重要性が強調されているだけです。

●なぜ行政は自己規制するのか

広瀬 文科省も、また教員委員会も自己規制してしまうのは、何を気にしているからなのでしょう。

田能村 何を考えての自己規制なのか。保護者から苦情が出されたら対応に困る、とか。

広瀬 「保護者」といっても、ほんの一部でしょうし.....声は大きいけど。

田能村 いまは、保護者も変わってきて、何か起こると教育委員会にストレートに訴える。学校を通さずに教育委員会にストレートに行っちゃうから、校長なんか大変なわけです。

広瀬 苦情は組織だった行動のようですね。けれど全国的に見たら、性教育は過激どころか不十分でしょう。性教育にブレーキがかかってしまうのは困ったものです。行政がこんな風に自己規制する中では実践にも本腰が入りませんよね。

田能村 ぼくは調べてみたんだけど、教育白書も厚生白書も、「子どもたちはこれこれです、だから性教育は大切です」と述べているだけですが、その背景として、学校現場で教員の経験をしたことのないお役人が、学校の在り方を規制したり注文することが増えている。

広瀬 性教育に対する行政的バックアップが整わないのは大きな問題ではありますね。どの辺りに原因があるとお考えですか。

田能村 行政は3年すると職場が替わるんです。だから専門家といっても自分の体験はなく、頭で考えただけです。

広瀬 校長も、最近は数年で移動していますね。学校経営に関しては、校長のリーダーシップが機能するかどうか、従来にも増して要になっていると思うのですが、学校内部においても、あるいは教育委員会との関係においても、これが必ずしもうまく機能しているとは限らない。

田能村 行政は校長に次々と指示を出し評価を求めています。校長や教員は多忙をきわめていて、全くゆとりがありません。昔は職員会議が終わったら校長も一緒に一杯飲みに行って、それでそれぞれの教員の人柄や生徒の話も出てきたもんですけど、いまはそういうことがありませんから

ねえ。

編集部 全性連は毎年夏に全国大会（全国性教育研究大会）を開催していますが、参加人数が減るとか、直接的な影響は出ていないのでしょうか。

田能村 全国大会の参加者が急に減ったかという、そうではありません。性教育に慎重になっているとは思いますが、参加者は減っていない。だから、先生方のニーズはあるんです。全国大会では全体集会のあと、テーマ別の分科会が行われますが、参加者はテーマを選ぶようになった。たとえば「生命誕生」といったテーマにはたくさんの参加があるけど、「性衝動の発現」の分科会は大変少ない。

中学や高校の教科書には「性衝動が発現します」と記述されているけれど、先生は、その仕組みや、それにどう対応すればよいか、十分にわかっていない。教科書に示されていても、“ああ、人間て、そうかな”とか、“性衝動が起きたら我慢しなさい”“スポーツで解消しなさい”ぐらいで終わる。

広瀬 そうしたテーマには、例年参加者が少ない、ということですか。

田能村 いや、今年新たにテーマを設けたら参加希望者が少ないんです。でも、本当は一番困っていることだと思いますよ。子どもたちが性的に活発になっていることにどう対応したらいいかという分科会なんですけど、参加は少ない。

指導要領にのっている内容を教科書にしているわけですが、生徒にとってどう関係するのかという扱いがない。「高校生の性行為は社会的に認められていません」と言っても、高3で40%の性交経験がある時代に「あなた方の性行為は認められていません」というだけでは、授業は成立しない。

●純潔教育から性教育へ

広瀬 話題を変えますが、田能村先生の略歴というか、性教育に取り組むきっかけなどをうかがわせてください。

田能村 学校出てから軍隊に入って、終戦の翌年に帰還したんですが、教員養成学校（東京体育専門学校：現・筑波大学）を出ているので、勤務場所を指定されるわけです。

それで、いきなり女学校に行かされた。自分の郷里の、大分県の旧制女学校でした。4年制でしたから、いまで言えば中学3年か高校3年の子どもです。それがずいぶんと“おませ”で、妊娠する子も珍しくなかったんですよ。

昭和26（1951）年になると高等学校の保健の教科書が出来て、それで授

業をしなければならない。その中に「成熟期への到達」という単元があつて、月経、射精とか妊娠とか。それを教えなければならなかった。

しかし、ぼくはまだ20代半ばで、生徒は15歳ぐらいで、月経・射精の授業なんかできない。ところが指導書には、場合によっては、それを省くことができると思つた。その代わりに何をやったかと言うと、あのころ、世界文学全集が出始めていて、「人形の家」とかの抄訳を読んで終わったりした。

ところが純潔教育が提唱されるようになり、性の問題を扱わないといけない、と実感させられた。だから初めは性教育をやろうという気があつたのではなくて、やらざるを得なかったんです。

それから昭和29（1954）年に東京に出てきて、荒川区の中学校に赴任してから、仲間を集めて性教育についての勉強会を始めるようになったんですね。その集まりが昭和39（1964）年ごろに東京都の性教育研究会に発展していきまして、昭和40年の後半に校長になったこともあつて、その会長をすることになった。

広瀬 1972年に設立された性教育協会には、準備委員会があつたようですが、その研究会が準備委員会とつながって行くんですか？

田能村 いや、それとは別で。ぼくは性教育協会の設立には関わっていません

広瀬 性教育協会とその機関誌の『現代性教育研究』が日本の性教育の発展に果たした役割は多大だと思つているんです。60年代の価値転換の時代を経て、70年代に入るところになると、なんとというか、性教育は熱かつた。

世界のリベラルな性教育をほぼリアルタイムに日本でも吸収していた感じがします。いまの性教育の基本はすでにあの頃できていたと言つていい。そこへ移行するあたりはどんなだったんでしょうか。性教育をセクシュアリティの教育だと捉え始めるのもこのころですね。

田能村 ご承知のように戦後長らくは純潔教育という言葉が言われておりましたが、1955年ごろから生徒指導が万引きや睡眠薬遊びと合わせて、性非行の防止といったことが重要な課題となつて純潔教育が全国的に広がりました。

しかし1970年ごろには性解放といった社会の風潮が高まり、雑誌やマンガなどの性表現が露骨になり、ポルノ映画などの増加や性産業の出現などもあつて、性教育に対する認識が急速に高まりました。各都道府県教育委員会などから「性教育の手引き」類が発行されるようになり、70年ごろから純潔教育から脱皮して性教育を望む声が高まつたと言えます。

広瀬 言葉と言えば、文部省は「性教育」という言葉を長く避けて「性に関する指導」という表現を使つていました。表向きの理由は色々言われま

すが関係者に聞いたら、単にその言葉を嫌いな人がいただけだとか。

田能村 文部省の担当官が性教育という言葉が嫌っていたということもありますが、各教科については「〇〇教育」といい、各教科にまたがる教育に関しては「〇〇に関する指導」と呼ぶようにしていると聞いておりました。

● 「家庭科」の移り変わり

編集部 戦後の教育の動きを見直してみたら、1958年に中学校の家庭科が「技術・家庭科」に分かれて男女別になり、それが94年に「家庭科の男女共修」になったと改めて気づきました。性教育にずっと携わりながら、こうした動きをどんなふうにご覧になっていましたか？

田能村 家庭科は、昔から裁縫や料理を学んだりであったけど、家庭科という概念がはっきりしなかった。家庭科の教科書を書いている先生たちにも家庭科論が出てこない、それからずっと下がって、ジェンダーの問題が出てきてから、あらためて家庭科を考えるようになった。

広瀬 その「技術・家庭科」が、ジェンダー論から問題になるのは70年代になってからですね。戦後はこれはむしろ料理や裁縫とは違う、近代的な経営概念としてのホーム・エコノミックスの導入として問題になっていたと思います。まだジェンダーという概念がなかったし、家庭科が性別役割分業との関係で性教育で話題にされるのは大分あとです。

ちなみに58年というのは、問題解決学習とかコア・カリキュラムに代表される戦後直後のリベラルなカリキュラムの見直しがあつて、系統だったカリキュラムに転換した時期ではあります。

80年代になると「女性差別撤廃条約」を批准する必要から、男女共修が政策課題になっていきます。これとの関連で言いますと、そもそも性教育にジェンダーの視点が入り始めたのは、80年代以降でしょう。

60年代に登場するいわゆるリベラルな性教育は、もともとはリブ、フェミニズムの系統ではなく、セクソロジーの系統から出てきたもので、だから必ずしもジェンダーに関する問題意識を持っていたわけではありませんでした。フェミニズムがセクソロジーベースの性教育に「敵対的」であったこともありましたよね。「女のこと、わかっていない」というように。

田能村 そうですね。

● 「性の多様性」は、混乱のもと？

広瀬 けれど、性を扱っている性教育は、ジェンダーに無関心ではいられませんから、少しずつそうした考え方をに入れていきました。さらにセク

シュアル・マイノリティという問題意識も取り入れるようになった。

田能村 それで、だんだん混乱してきた（笑い）。脳の研究が進んできて、男と女に違いがあるんだ、とか。ジェンダーについても詳しくやろうとしても、教師のほうに問題があつて、子どもに話をしても分からないんです。ジェンダー・ロールについてはもちろん、性にはいろんなパターン（指向性）があるんだとか説明しても、中学ぐらいでは混乱するだけでしょ。

ぼくは1ついま問題だと思うのは、マスメディアが性の多様性をいろいろと取り上げるから、それでかえって悩む子どもが出てくる。たとえば、自分は異性に興味が無いから、それでホモセクシュアルじゃないかと悩む。

自分自身をつかまえるのに、ホモセクシュアルが何パーセントかいるんだよと言われてしまうと、そうでない者まで悩んでしまう。現実には、そういうケースを聞いています。ですから、性の指向性は多様なんですよと教えるだけですむのかどうか。

広瀬 けれども、同性愛を教える前から教室には同性愛者はいるわけですし。概念がないために自分のことが理解できずにいる子どももいるでしょう。概念が与えられることによって、「あ、自分は同性愛者なんだ」とストンと落ちる。自分のアイデンティティとして。ですから概念を教えることにはそうした効用もある。問題があるとすると、だれにでも概念をあげていいのか、ということになるのでしょうか。

田能村 しかし、それには発達段階がある。インターセックスも、ある年齢になれば自分で理解できるけど、一斉に教室でそれを教えられるのはどうなのか。

広瀬 でも、この問題はあれと似てませんか？ 初潮はいつ教えるかという問題と。初潮を迎える時に、あらかじめ教えておいたほうが混乱がないと言われますね。

田能村 でも初経は自分で乗り越えられる課題だけど、一方の半陰陽は乗り越えられるかどうか。それを社会全体が受け入れられるものであればともかく、差別が社会にある時は本人の受け止め方が違う。

広瀬 とはいうものの、「自分は何か、ひとと違う」というモヤモヤを持ち続けるのは……？

田能村 だから、ぼくが言うのは、発達段階のどこで知らせるか、という問題なんです。たとえば中学2年とか3年で、自分はホモセクシュアルかもと知ることになると、それを肯定的に受け止められるかどうか。悩んでいる本人が相談にきたなら、言えるんだけど、一般的に授業として話すのは、どうか。

広瀬 確かに上手に扱わないと、知識を教えるだけになってしまうかもしれません。

田能村 そうなんです。たとえば思春期になると二次性徴が現れますということだけを教えていて、それをどう受け止めるかという、その扱い方が抜けていますよ。

広瀬 マイノリティの情報の扱いは確かにむずかしい。相談に来た子どもに個別に必要な情報を与えるという方法もあり得ますが、そうすると相談に行けずに1人で悩んでいる子どもに対応できなくなってしまう。性教育の授業だけでは対応できることとできないことがある。

田能村 だから、カウンセリングもあるよとか、そうしたモヤモヤを解決する手段・方法を伝えなければいけない。ただ、「相談にきてよ」と言っただけで、本当に先生が相談にのれるのか、それもむずかしい。

● 「だれもが学ぶべきこと」とは？

広瀬 さっきの性交を教えるかどうかにもつながりますが、これは扱うことの是非の問題というよりは、適切に扱えるかどうかという教師の力量の問題だと言ってもいい。

性交は、扱わなければならない時には扱わなければならないのですが、授業で性交を扱うのはだれもができることではない。言ってみれば性交を扱う授業というのは性教育の実践のなかでも先端的なところに位置します。

しかし性教育を広めるためには、だれでもできる実践というものが、そうした先端的な授業づくりとは別に必要なわけですね。いまの日本の性教育は、だれでもというよりは、一部の熱心な教員の意欲に支えられている状況でしょう。性教育の拡大を図るのには、特別に熱心な教員や力のある教員でなくてもできる授業が広まる、というのが不可欠な要件です。

田能村 だから、その、だれでもできるというような事例を養護教諭などが作って一所懸命やってるわけですが、だれでもできるだけでいいか、というとそうではなくて、問題が非常に多いわけですね。本当はだれでも学ばなければならないものは何か。性教育でだれでも学ぶ必要があるのは何か。

広瀬 なるほど、だれもが教えられるものは何かでなくて、だれもが学ばなければいけないものは何か、ですね。

田能村 そうなんです。それがはっきりしていない。教育だからまず目標を定めようとして、3つをあげている。アイデンティティと人間関係と社

会の一員としての視点から、その目標を達成するために必要なのは、年齢別に何であるか、それを幼稚園から高校まで挙げています。それをもう少しわかりやすく解説してやればできるのかもしれない。

ところがその解説が、性欲が出てきたときはコントロールしましょう、みたいなものが多い。それを具体的にわかりやすくすればいいのでは、と考えている。

●イギリスの性教育に学ぶ

広瀬 私はイギリスの性教育政策を1つの研究テーマとしてここ10年以上調べています。イギリスでは、保守的といわれたサッチャー政権下で1994年度から性教育が義務化されたんです。そこで義務化された性教育は、内容的には労働党に近い家族計画協会(FPA: Family Planning Association)が1970年代から主導してきたいわゆるリベラルな性教育を基本にするものでした。

この義務化に対してはキリスト教右派からは激しい攻撃がありました。保守党政府は、大きな社会問題となっていた十代の望まない妊娠を減らすことを急務としていましたから、実効性を求めて、右派と対抗しながら義務化を実現させるんです。

FPAのほうはといえば、全国的に実践を普及させる役割を担うことになるわけですから、以前の先鋭的な運動的言説から、広く受け入れられるようなものに1980年代の後半あたりから主張を変えていきます。

この変化は、多様な意見があるなかでの制度化には大事なことで、内実は維持しながら目的に見合った対応が工夫されたということでしょうか。結果的にリベラルな系統の性教育が保守党政権下で全国展開したということなのです。

性教育をめぐる政治的な対抗関係や、制度化の背景なども含めて、イギリスの、性教育が義務化に至る一連の動きはなかなか面白いのです。日本で、60年代から70年代にかけての時期に、性教育に関心をもち始めた人たちは、ほぼ例外なくといっていいほどリベラルな性教育を勉強しますよね。

先ほど触れた『現代性教育研究』は、1972年から1983年まで刊行されましたが、そうした人たちが集い、情報交換だけでなく広く情報を発信する役割を果たしたと思います。現在の性教育協会はもちろん、田能村先生の全性連も、そして性教協も、基本的にはその延長にあるわけですね。

このあたりは、日本の性教育の独自の経緯ということになるのですが、イギリスに見られる動きと重なるものも日本にいろいろ見られますよ。そういうことも含めて、イギリスの性教育を面白いと思っています。

田能村 性教育関係者でイギリスに勉強に行く人が確かに増えています。

そしてライフスキルという言葉が注目されてきたけれど、これがなかなか日本では一般化しない。それで「ライフスキル教育を基盤とした性教育」といったテーマを掲げている。

いま日本の性教育について文科省が頼りにならないならば、だれかがやらなければならないということで、特に今年神戸で開催する大会については2つの思いがあった。

1つはライフスキル教育を一所懸命やろうとしている神戸大学の石川教授。ぼくのほうはもっと基本的なことをレクチャーしよう。性って、こんなもんですよ、と。だから第1日目は基本的な問題をレクチャーして、2日目はそれを元にしてワークショップ形式でやろうと。

広瀬 時々私は、日本で性教育が義務化しないのは、行政が性教育にあまり関心を持っていないからではないか、と聞かれることがあります。でも、必ずしもそういう理由ではないと思っています。

イギリスでは確かに義務化しましたが、それはイギリスの政府が性教育に積極的な意向を持っていたからではなく、性教育の義務化に頼らなければならないほどのせつば詰まった事情があったからなんだと思います。

イギリスは性について保守的でナイーブな国ですから、性教育なんかやらないで済むならやりたくないわけです。それがやらざるを得なかったのは日本とは桁違いの十代の妊娠の増加や、HIV/エイズの拡大に直面したからです。日本は、色々問題は言われていても、結局のところいままでは、性教育を本格的に制度化するほどせつば詰まっていはいないのですよ。

田能村 だから、詰まっているところが違うんでしょ（笑い）。

● 「知識」 だけでは伝わらない

広瀬 日本でもエイズが拡大しそうになった1980年代の終わりごろにはあんなに保守的だった行政も「コンドームを使いましょう」と、垂れ幕をたらしたり、テレビでメッセージを流したりしましたでしょ。必要だと思ったら、日本の行政もやるんですよ。

田能村 日本は宗教がないでしょ。だからカテゴリーとして一番重要なものが道徳教育になってしまっている。性の問題よりも暴力とかタバコが重視され、それを道徳教育で抑えようとしている。

ぼくらからすると、性教育でないと暴力もタバコも片づかないけれど、それはお役人には通用しない。国会が見ているのは表面的なことで、本質的なところでどう子どもを変えていくかにならない。

広瀬 性教育にしても道徳教育にしても、つまるところは子どもの依拠できる価値観や人生観、そういうものをきちんとしましょうということですが、戦後長らく日本では道徳教育がタブーとなる事情がありましたから、

道徳教育でそうしたことが十分に行われてはこなかったということがあります。道徳教育というと愛国心か反愛国心みたいな議論になってしまったりする。

名称は道徳教育でなくてもいいんですが、その道徳教育の中に性教育的な要素が入ってもいいし、あるいはその逆でもいい。価値観や人生観のない性教育なんかはないわけだから、両者は密接に関わるはずのものです。それらを統合した広い観点からの性教育であるのがいい。

田能村 そうですね、性教育かどうか、名称はともかく、アイデンティティを作る教育、対人関係を育てる教育、社会的な存在を高める教育。これを実践すればいいんだけど、それがなかなか先生たちに広まらない。

広瀬 なぜなんですかね

田能村 教師にとっては、自分の育ちや性に対する意識、価値観の違いなどが非常に大きいと思います。だから教師自身の性に対するこだわりを払拭して授業に臨まないといけないというけれど、そんなこと関係ないと思っている。

教える側の性に対する意識や価値観を問題にしないと、性教育の授業は単に性の知識を教えるだけで、子どもたちには大切なことが伝わらない。
(了)

[表紙へ戻る](#)